急所で勝負

作＝かくたん

第一章

「エイッ」

今日も道場生は練習に気合が入っているようだ。

ここの空手道場には女性を対象にした護身術コースが設けられていた。昨今の治安の悪さからか護身術コースは女性達の人気コースとなっていた。

「はーい、皆さん次は蹴りの基本練習ですよ。左右交互に股間の急所を狙って蹴り上げて下さい」

女性インストラクターの元気な声が響いた。

山神由紀は幼い頃から空手を習っており、大学卒業時に空手の腕を見こまれてここの空手道場の護身術インストラクターにスカウトされたのだった。彼女は長くしなやかな足を生かした蹴り技を得意としていた。そんな彼女は女性の護身術には男性の急所、つまり金的を狙うのが最も効果があると信じ指導を行っていた。実は彼女は様々な男達と実践で対決し金的蹴りで全勝した武勇伝の持ち主だった。金的蹴りに関しては彼女の右に出る者はいないとうわさされるほど彼女は

金的蹴りの名人であったのだ。

護身術コースに通う女性達の何人かは痴漢にあったそうだが、彼女の指導のおかげでみんな確実に痴漢の金的を蹴り上げ一撃で撃退したそうだ。なかには蹴りが強すぎて睾丸損傷で痴漢を病院送りにした女性もいて実践を体験した女性達は金的蹴りの威力に自分たちも驚いているようであった。由紀はこのあたりの力加減ができるようにならないと一人前とはいえないと指導していたが、初めての実践での金的蹴りではしかたないかなと思っていた。

たいていの女性の道場生は、

「こんなに楽しくて役に立つのなら友達にも教えてあげよう」とうわさを広めていった。

うわさがうわさを呼び由紀の護身術コースは益々道場生が増え、練習メニューも蹴りから叩き、握り、踏みつけへと高度化していった。しかし、練習の基本は力の弱い女性が男性に勝つことを目的としている以上、男性の最大の急所である金的への攻撃が中心であった。

同じ道場で実践空手コースのインストラクターをやっていた上田雄太は護身術コースの盛況ぶりがおもしろくなかった。実践空手コースは金的を禁止し金的以外を直接叩き合うもので一般人には厳しすぎるのか道場生は下降線をたどっていた。となりのコースは若い女性達が楽しそうに、

しかも一撃で相手を倒す技を習得している。こちらはむさ苦しい男どもが力まかせに叩き合いをやっている。実践空手コースの道場生には金的を蹴られるのを覚悟で女性達の護身術コースへ移りたいと思うものさえいた。

由紀は男性が護身術コースへ入ってくるのを歓迎した。いくら練習しても男性の迫力で押されたら女性は萎縮して技が出せなくなることがある。どんな女性でも確実に男性の金的を蹴り上げるためにはやはり実際の、それもできるだけ迫力のある男性と練習するのが一番である。ただ、最大の急所である金的を持つ男性と金的蹴りの指導を受けた女性が金的ありで空手の試合をすることは、男性にとってかなり危険でありむずかしいと由紀は思っていた。

そこで由紀は男性には原則としては金カップをつけてもらうこととしていた。

しかし、それではどのくらい金的蹴りの効果があるかわからないという女性達の意見もあり、由紀は男性に了解してもらった場合にのみ、女性達が金カップをつけていない男性と試合することを認めることにした。

もちろん、金カップなしの金的を思いきり蹴り上げていたらいくら男性がいてもたりなくなる。そこで、由紀は女性達にまず自分の股間をある程度力を押さえて蹴り上げさせ、その力加減を彼女達にわからせた上で男性の金的を蹴らせるようにした。

金カップをつけない男性と女性が空手の試合をする日がやってきた。金カップなしで女性達の対戦相手を引き受けたのは実践空手コースから新たに転入してきた田中康雄であった。康雄は気が進まなかったが、女性達に男が女相手なら大丈夫よとおだてられたこともあり、金的蹴りは手加減するという約束で金カップをつけないで女性達と対戦することを引き受けたのだった。このとき康雄は金カップをつけなくても鍛えた男が女に負けるわけがないと女性達をあまくみていたのも事実だった。

由紀は最初の女性選手にＯＬの柴田裕子を選んだ。

裕子は１年前に女子大を卒業後ＯＬとなったが、残業しての帰宅途中に痴漢に襲われ、胸や股間を触られた経験があった。その事件をきっかけに裕子は護身術コースに入会し、この１年間熱心に由紀の指導を受けてきた。

裕子の金的蹴りの力調整が始まった。

「２割程度の力で私の股間を蹴り上げてみて」

と由紀は足を開きながら裕子に言った。

ポコン。

裕子は由紀の股間を２割程度の力で軽く蹴り上げた。

「ほとんど感じないくらいね。それ以上強くしてせっかくの男女対決が一回で終わるといけない

からそのくらいでいいわ。金的を蹴るときは今くらいに手加減することを忘れないでね」

由紀は念を押すように言った。

「ハーイ」

裕子は少し物足りなさそうに返事をした。

その様子を見ていた康雄は由紀の股間がほとんど感じないくらいなら大丈夫だろうと安堵した。

康雄は金的禁止のルールでしか戦ったことがなく金カップなしの金的を蹴り上げられた経験はなかった。これから康雄は彼の認識があまかったことをおもいしる貴重な体験をすることになった。

「これより男性対女性の練習試合を始めます」と由紀が言った。

裕子と康雄は向かい合って戦いの準備をした。

由紀の「はじめ」の合図で最初の男女対決が始まった。

すぐさま康雄は裕子に攻め寄った。

康雄が裕子を攻撃しようと足を踏ん張ったため金的が無防備となった。裕子はひるまず２割程度の力で康雄の金的を足の甲で蹴り上げた。

「エイッ」

ポコン。
「グェッ」
康雄は悶えながら股間を押さえ裕子の足元に前のめりにしゃがみこんだ。重苦しい痛みに襲われそのまま立ち上がれない。
「金的蹴り一本、女性の勝ち」
由紀が裕子の手を上げて言った。勝負は数秒でついてしまった。
「実践空手をやってても金的ががら空きね」
「金的をきちんとガードしなくちゃとても女には勝てないわね」
「だけど金的って攻撃しやすくガードしにくい場所にあるわね」
と女性達は口々に言った。。
裕子はやったといった表情でうれしそうに勝ち誇っている。
初めて金的蹴りをみた女性達は
「たったあの程度の蹴りで、ちょっと演技入ってない」
などと笑っていたが、康雄の苦しそうな形相をみて、
「ほんとに苦しそうよ。」
「ちょっと裕子、練習のとおり手加減したんでしょうね」
と裕子に詰め寄った。

「も、もちろんよ。さっき由紀さんの股間を蹴り上げたときと同じよ。ちがうのは、足の甲に柔らかいものを感じただけよ」
裕子があわてて弁解した。
その言葉を聞いた女性たちは、
「あんな小さいタマがあるだけでこんなになるとはね」
「まじすごいよ。」
と金的蹴りの威力を認識した。
由紀は、
「康雄君は私達のために協力してくれてるのよ。みんな真剣にやってね」
と女性達に説教したものの、
「やはり女性の股間では男性の金的への蹴りの威力を調整するのはむずかしいな。かなり弱く調整したつもりだったけど強すぎたかしら」
と内心思っていた。
由紀の言葉に態度を改めた女性達は由紀に教わったとおり、苦しむ康雄の腰を後ろから叩いたりして介抱した。大勢の若い女性達に介抱され回復も早まったのか康雄は２０分位で起きあがってきた。

「すみません。最初なので痛みに慣れてなくて。でも皆さんのおかげでもう大丈夫です」
康雄はくやしそうに言った。
女性達は「金的の痛みって慣れるものなのかなあ」と不信に思った。
由紀が、
「かなり手加減したのですがもう無理ですか」
と言うと女性達からは残念そうな声が聞かれた。
康雄は、
「空手で鍛えた体なのでまだ大丈夫と思います。僕も女性のこの程度の蹴りで負けたままではくやしいのでもう一度やらせて下さい。」
と自信ありげに言うと空手の構えをとった。
そのとき康雄は後で強がりを言ったことを後悔することになろうとは思ってもいなかった。

第二章

次の女性選手には新人モデルの新藤恵子が選ばれた。
人気モデルであった恵子はストーカーに狙われることが珍しくなく、常に危険にさらされていた。
彼女は必要に迫られ、２年前友人から紹介されたここの空手道場の護身術コースに入会したのだ

った。
２年間由紀にみっちり指導を受けた恵子は、彼女の素質もあってか、どのような男性相手でも確実にすばやく金的を蹴り上げる技を身につけていた。彼女の正確にコントロールされた金的蹴りは護身術コースの女性達の手本となるほどの技であった。

恵子の金的蹴りの力調整が始まった。
由紀は恵子に自分の股間を７割程度の力で蹴り上げるように指導した。
由紀がさっきの蹴りよりもかなり強くしたのは、女性達と金的の痛みに慣れてないなどと負け惜しみを言っている康雄にほんとの金的蹴りの威力を体験してもらいたかったからであった。もちろん、恵子に思いきり金的を蹴り上げてもらいたかったが、それでは康雄の金玉が潰れてしまう。そこでこの程度の力加減としたのだった。
強がりを言っても康雄は所詮恵子の敵ではなく、今度の試合で彼女に金的を蹴られて暫く動けなくなるだろうと由紀は思っていた。
由紀は腕を組んで足を開き仁王立ちになった。
パシンッ。
由紀の股間に恵子の蹴りが練習どおりにきれいに入った。
由紀は股間の肉ヒダが押しつぶされる強さを確認し、金玉があった場合にどうなるかを想定し

た。
「まずまずね。もう少し膝のスナップを効かす方がなおいいわね。あ、それともう少し手加減してね。潰れちゃうといけないから」
と由紀が言うと恵子は
「はい、潰さないように気をつけます」
と素直に応えた。

その様子を見ていた康雄は恵子の鋭い蹴りに背筋がぞっとしたが、女性達の手前ここで止めるわけにはいかないと覚悟を決めた。
「これより男性対女性の練習試合の２回戦を始めます」
と由紀が言った。
恵子と康雄は向かい合って戦いの構えをとった。
由紀の「はじめ」の合図で２度目の男女対決が始まった。
康雄は今度は金的を膝でガードしながら太い声で「オリャ」と気合を入れて恵子に襲いかかった。
あまりの迫力に恵子は怯みそうになった。
「落ち着いて」

「金的ねらって」
「金的蹴れば勝ちよ」
「金的、金的よ」
という女性達の声援のおかげで落ち着きを取り戻した恵子は、康雄の金的にスキができるチャンスをうかがった。
康雄が恵子を責めようと足を踏み出したとき膝の金的カードが一瞬崩れた。
恵子はこの瞬間を逃さなかった。
恵子は女性らしい気合とともに康雄の金的めがけて足の甲を振り出した。
「エイッ」
バシッ。
恵子のスナップの効いた金的蹴りが膝のガードをくぐり抜け康雄の金的にみごとに入った。
康雄は金玉が２個とも恵子の足の甲と自分の恥骨の間に挟まって押しつぶされたことを感じた。もう少し蹴りが強ければ康雄の金玉は確実に潰れていたことであろう。恵子の正確にコントロールされた金的蹴りのおかげで康雄の金玉は蹴り潰されずに助かった。金的を蹴り上げた恵子は由紀に教わった通りにすばやく蹴り足を引き戻し、「まだやるか」といわんばかりの構えをとった。
美しくてコントロールされた金的蹴りとその後の構え、どれも由紀の教えたとおりであった。

由紀も女性達も蹴られた康雄さえもがすばらしいと思った。

もちろん手加減してあるとはいえ、これだけの完璧な金的蹴りを食らった康雄には生地獄がまっていた。

康雄は恵子の蹴りに見とれたあと両手で金的を押さえ、構えを取った彼女の足元に前のめりに崩れ落ちた。

康雄は悶えながらも目の前の恵子を見上げ

「おみごと、まいりました」

と負けを認めそのままうずくまった。

「金的蹴り一本、女性の勝ち」

由紀が恵子の手を上げて言った。

「ナイス、金的蹴り」

女性達がうれしそうに言った。

恵子は勝ち誇ったように仁王立ちで両手を腰にやり、金的を押さえて足元にうずくまった男を見下ろした。

なんという快感なんだろう。空手で鍛えた男を一撃で倒すなんて。

恵子「金的蹴りはかなり手加減してあるのに苦しそうね。強そうにしてても金的を狙えば男なんてたいしたことないわ」

恵子はなにもぶら下がっていない自分の股間を眺めて女であることを誇らしく思った。

康雄は襲ってきた激しく重苦しい痛みに耐えかねて恵子の誇らしげな股間の下でうめき声を出しながら転げまわっている。

「グェー、ウーン、ウーン」

さすがに鍛えた男といえども悲惨な状態になった。

康雄は悶えながらも目の前にあった恵子の足首になんとかつかまり生地獄の苦しみに耐えていた。

恵子は得意そうに自分の誇らしい股間をもがき苦しむ康雄の頭上に突き出して、

「金玉なんかぶらさげてるから女に蹴られて苦しい思いをするのよ。私の股間を見ながら反省しなさい」

と言ってしまった。

康雄はもがき苦しみながらも恵子の股間を見上げて金玉がないのを羨ましく思った。

その様子を見ていた女性達は、女が鍛えあげた男を一撃で地獄モードにするという金的蹴りの威力に陶酔していた。

「女性のみなさん、女に金的を蹴られた男がどうなるかわかりましたか。手加減した蹴りでも女性では考えられないような苦しみかたですね。金玉はこれほど脆いものなんです。金的禁止ルールでは圧倒的に不利だった女性が、金的攻撃を認めただけでこれまで絶対に勝てなかった男に勝てたのです。それどころか最大の急所である金的を持つ男性の方が圧倒的に不利なんです。金的禁止ルールは、女性に負けたくない男達が自分達に有利なように勝手に作った女性を差別するものです。金的攻撃は男女平等の時代には当然のことなんです」

由紀がこれまでの練習が正しかったことを女性達に説明した。

「男の勝手なルールはごめんだわ。これからは遠慮なく金的を蹴らせていただくわ」

と女性達も納得して言った。

「女性のみなさん、金的攻撃を認めれば女性の方が圧倒的に有利になることがおわかりいただけたと思います。そろそろ彼を介抱してあげてください」

由紀は女性達が得意になるのはいいのだが、このままでは大変なことになるので彼女達に康雄を介抱するように命じた。

康雄を見下ろしていた女性達は由紀の言葉に状況を察しあわてて介抱しようとした。

康雄は顔色が青ざめ、脂汗をたらしながら痙攣している。

由紀はこうなったときのために氷を用意していた。

女性達は康雄の腰を叩いたり、腫れあがった金玉を氷で冷やしたり、痙攣している筋肉をほぐしたりした。

その後康雄は数回嘔吐したが、一時間位たったころ女性達の介抱のかいあってなんとか立ち上がれるまでに回復した。

「よくがんばったわね、本当にありがとう。次からは必ず金カップをつけてあげるから安心してね」

と由紀が言った。

女性達も

「金的蹴りの威力と怖さがよくわかりました。次は金カップつきでお願いします。ありがとうございました」

と言いながら康雄に一礼した。

金的蹴りの威力を思い知った康雄は、女性に負けた悔しさと強がっていた恥ずかしさのあまり言葉がでなかった。

しかし、康雄は女性にまったく歯が立たなかったことを認め、股間を押さえながら女性達に敬意を払って頭をさげた。

「さあ、みんな今日の練習はこれまでよ。打ち上げに行きましょう。体を張って協力してくれた康雄君には十分にお礼しなくちゃね」
と由紀が言った。
「そうね、私のせいで使い物にならなくなってないかチェックしなくちゃね」
恵子が康雄の左腕をつかみながら言った。
「そうそう、私もチェックしなくちゃね。ついでに私のもお願いしようかしら」
裕子が康雄の右腕をつかみながら言った。
その夜、康雄は由紀をはじめ若い女性達から十分な金的のチェックと介抱を受けることとなった。

第三章

こうして康雄は護身術コースの女性達に溶け込み空手の練習を行うこととなった。
男の金的を蹴り上げることばかり練習してきた女性達も、実際に女性に金的を蹴られた男がどうなるかを見て、金的蹴りには力加減が必要だということがわかった。
康雄が由紀のところへやってきた。

康雄「いくら激しい練習をして鍛えていても、金的への一蹴りで女性に負けてしまうことがよくわかりました。これからは由紀さんに教えてもらいながら、金的のない女性達に勝てるように練習しますのでよろしくお願いします」
由紀「康雄君、わかってくれてありがとう。男性も護身術としての金的蹴りは絶対身につける必要があるのよ。だけど男性達はなかなか金的攻撃を認めようとしないの」
康雄「ぼくも金的蹴りでノックアウトしたほうが反則負けになるルールはおかしいと思ってました」
由紀「そうよね。急所というほどのものじゃないけど、女性の胸への攻撃は当然のように認められてるわ。それなのになんで金的は反則なのよ。女性は金的禁止ルールに泣かされてきたのよ」
康雄「そうですよね。でも、これからは男女平等なルールで本当の強さを身につけたいです」
由紀「金的が男だけの急所なのが悔しくて隠してちゃ、いつまでたっても強くならないわ。金的をもつ男性が女性と練習するのは大変でしょうけど、男性の場合は金的防御も含めて練習していきましょう」
自分の考えを理解してくれる男性が現われて由紀はうれしそうであった。
由紀「さあ、次は実践練習よ。康雄君は金カップを忘れないで」
康雄「もちろんですよ。まだ男でいたいですから」

「ハハハ」
女性達の笑い声がした。
康雄は金カップをつけたものの、まわりの女性達が股間になにもつけていないのを見てなんだか惨めになった。
由紀「康雄君は金カップをつけてるから大丈夫よ。男性の迫力に負けないように思いっきり金的を蹴り上げましょう」
康雄「さあ誰からでもかかってこい」
女性達は次々と康雄と対戦した。
パシッ。
康雄が避けるよりも早く、最初の女性の蹴りが彼の金的を捕らえた。
「ナイス、金的蹴り」
女性達が言った。
「私の金的蹴りの方が早かったわね」
最初の女性が得意そうに言った。
康雄「クソー、まいりました」
康雄はこの前の経験から金カップがなかったらどうなったかを想像し、今の女性の金的蹴りで負けを認めざるを得なかった。

最初の女性は勝ち誇って次の女性と交代した。
康雄は女性達に続けざまに金的を蹴り上げられた。
「康雄君、金カップがなかったら今の私の金的蹴りで、あれは蹴り潰されて悶絶ね」
強烈な金的蹴りをきめた女性が康雄の股間を指差して得意そうに言った。
康雄は悔しかったがその女性の言うとおりなので反論はできなかった。
康雄「クソ、こうすばやいとなかなか防げないな。ならこれでどうだ」
パシッ。
康雄は順番に向かってくる女性達の中からガードの甘い初心者の女性の股間を蹴り上げた。
「いやだ、くすぐったいわ」
蹴られた女性がいった。
「フハハハ」
それを見た女性達がいっせいに笑った。蹴られた女性と康雄も笑った。
「ちょっと康雄君、金的のない女性の股間を蹴ってどうするの。笑わせないでよ」
「男だって金的蹴りの練習は必要よ。今のいい金的蹴りだったわ。男だったら悶絶ものね」
「そうそう。私のも蹴っていいわよ」
別の女性が股間を突き出していった。

康雄「そうか、女性の股間なら金カップなしでおもいっきり金的蹴りの練習ができますね」
「でもそれじゃ男との練習にならないじゃない。金カップがないときにはいいアイデアかもね」
別の女性が言った。
康雄「あっ、そうですよね」
道場に楽しそうな雰囲気が広がった。
女性達に金的を蹴られながらも康雄は金的を防御する方法を身につけつつあった。

由紀「ハーイそこまで、みんな休憩の時間よ。」
恵子「康雄君のおかげで実践らしい練習ができるわ。男性の迫力はちがうわね。でも、康雄君はまだまだ金的があまいわよ」
康雄「恵子さんの金的蹴りを防ぐのはまだ無理ですよ。裕子さんの蹴りならなんとかなりそうかな」
裕子「あーら、そんなこと言っていいの。じゃ、私とやるときは金カップを外してよ」
康雄「い、いや、それは許して下さい」
裕子「冗談よ。男は金カップがないとすぐうずくまって練習にならないんだから」
康雄「すみません。」
裕子「でも、金カップってつけるとどんな感じなのかしら。ちょっと貸しなさいよ」

裕子が康雄から金カップを奪いとり股間につけた。
裕子のすっきりした股間がもっこりした。
恵子「あら、お似合いよ。裕子のもっこり。フフフ」
裕子「こんな邪魔でかっこ悪いもの女には必要ないわ。」
恵子にちゃかされ、裕子はあわてて金カップを脱いで放り投げた。
康雄「なにするんですか。ぼくにとってはとても大切なものですよ」
康雄があわてて裕子が放り投げた金カップを拾いにいった。
「フフフ」
康雄の滑稽なしぐさに女性達が微笑んだ。

裕子「ああ、すっきりした。やっぱり股間はこうでなくっちゃ」
裕子が自分の股間をパンパンと音を立てて叩きながらいった。
裕子「康雄君も金カップなしで股間を叩いてみて。どっちが大きい音をだせるか競争しようか」
裕子が意地悪そうに言った。
パン、パン、パン。
床に座ったいた女性達も自分の股間を叩いて音の大きさを競争した。
「ほら、叩いて、叩いて」

自分の股間を叩きながら康雄に近づき、早く叩くようせかす女性もいた。
康雄「い、いや、それは、その、こうですか」
「それじゃ、さわってるだけじゃないの。ワハハハハ」
康雄が自分の股間に軽く手をあてただけで叩けなかったのを見た女性達が大笑いした。
康雄「やっぱりできません。すみません」
裕子「自分でできないなら手伝ってあげましょうか。男性の股間はどんな音がするのかしら」
裕子が手を大きく後ろに引き康雄の股間を叩こうとした。
康雄「ワッ、止めて下さい」
康雄が腰を引いて股間を両手で隠した。
それでも、裕子の手が迫ってきた。
康雄「ワッ」
康雄は思わず裕子の前で尻餅をついた。
パーン。
裕子は後ろに引いた手で自分の股間を力づよく叩き、得意そうに微笑んだ。
康雄「い、いや、す、すごいっすね」
康雄は裕子の股間の前で尻餅をついたまま、裕子の股間を叩く音と迫力に驚いた。
恵子「あまり彼をいじめないであげて」

裕子はペロッと舌を出しておどけてみせた。

女性達と康雄は心地よい汗を拭き、楽しく会話しながら休憩していた。
しかし、その楽しそうな雰囲気を壊すものが近づいていることに女性達も康雄も気づいていなかった。

第四章

女性達が休憩しているところへ、康雄が護身術コースへ移ったことを聞きつけた実践空手コースの上田雄太が乗り込んできた。
雄太「おい康雄、こんなところでなに遊んでんだ。いつから女と空手ダンスやるような軟弱になったんだ」
康雄「僕は護身術コースでまじめに空手の練習をやっているんです」
雄太「ハハハ、お前女相手になにが練習だ。空手は俺が教えてやるから戻ってこい」
康雄「雄太さんに鍛えてもらったことは感謝してます。でも、ここで実践の技を身につけたいんです」
雄太「女相手になにが実践だ。うちのコースが実践だぞ」

康雄「金的を禁止していたのでは本当の実践ではありません」
雄太「ハハハ、金的が実践なんていってるのはそこの弱い女どもがしかたなくいってるだけだ。女どもが金的がどうのというのならマン的を蹴り上げてやれ」
康雄「な、なんですか、そのマン的って」
雄太「男の股間が金的なら女の股間はマン的といってな、同じような急所なんだ」
「エエー、女の股間が急所ですって」
ある女性が驚いたように言った。
「プー、ハハハハ」
女性達はふきだして笑い出した。
雄太「なにがおかしい女ども。笑ってるやつはマン的を蹴り上げるぞ」
雄太が怒って女性達に手を出そうとした。
「止めてください」
由紀がたまりかねて言った。
由紀「私達は腕力のないものが身を守るための技を練習しているんです。康雄君もその技を見につけようとしています。じゃましないで下さい」
雄太「お前が金的蹴りを教えてる女か。金的を蹴ろうとしてマン的を蹴られたらどうするんだ」
由紀「さっきからマン的ってわけのわからないことをいってるけど女性の股間のどこが急所だと

いうんですか」
雄太「そんなこと知るか、股間全部じゃないのか」
由紀「マン的は金的だけが急所じゃ悔しい男のでっちあげじゃないですか」
雄太「なんだと、それなら俺と勝負してみるか」
由紀「そこまでいうのならしかたないわね。でもほんとうにいいんですか」
雄太「もちろんだ、そのかわり俺が勝ったら康雄は連れて帰るぞ」
由紀「じゃ私が勝ったらこちらのいうことを聞いてもらうわよ。勝負の方法はか弱い女が決めていいでしょ」
雄太「金的ありでもなんでもいいぞ。勝手にしろ。」
雄太は空手で勝負するつもりだった。
由紀は金的ありなら楽勝だと思ったが、傲慢な雄太を懲らしめるためといい機会なので女性達の教育のためにある考えを思いついた。
由紀「男のいうことが正しいかどうかを確認する勝負をします。金的対マン的の勝負よ」
「ワァー、おもしろそう。そうこなくっちゃ」
女性達が騒ぎ出した。
康雄「雄太さん、やめた方がいいと思いますが」

雄太「やかましい。マン的など一蹴りで片付けてやる」
由紀「勝負はお互いの股間を責め合ってタップした方が負けとします。負けの認め方ははっきりさせるために相手の股間にタップします」
雄太「な、なんだと」
「ハハハ、股間だけの責め合いなら男に勝ち目はないわね」
女性達が笑い出した。
由紀「責め方は叩き、蹴り、握りの三回勝負とします。女が方法を決めたので男が先で交互に攻撃します。最初は弱い力で攻撃し次第に力を強くしていきます」
「ギャハハハ、叩き、蹴りはまだしも握り合いって、そりゃ無理よね」
女性達がまた笑った。
雄太「お、おい、少し勝手すぎないか」
由紀「あら、あなたがいいだしたことでしょ。それとも女の股間は急所じゃないって認めるの」
雄太「クッ」
由紀「これからは厳正な勝負よ。みんな手出し無用よ。よーく見てて」
由紀が堂々として女性達に言った。
女性達も由紀の考えがわかったのか静かに回りを取り囲んだ。
由紀「審判は裕子さんにお願いします。それから勝負を公平にするため股間に防具などがあって

はいけません。勝負は全裸で行います」
裕子「わかりました。では服を全て脱いで下さい」
由紀はすばやく下着まで脱ぎ、雄太もしぶしぶパンツまで脱いだ。
裕子の前に由紀は腕組みして大股開きに立った。雄太は手で股間を隠しながら立った。
裕子「隠しちゃだめよ。お互い足を開いて手は腰において。股間になにもないか確認するわよ。さ、男らしく手をどけて」
雄太が足を開いて手をどけると垂れ下がったチンポと金玉がゆさゆさと揺れた。全裸になってもヘアしか見えない由紀に比べてぶらぶらしているのはみじめで隠したくなる気持ちは女性達にもわかった。

だが、惨めさはまだ続いた。
若い女性の全裸を若い男が見れば当然ではあるが雄太の鎌首が起きあがりだした。あわてて隠そうとした雄太であったが
「隠しちゃダメ」
と裕子に手を押さえられた。
雄太「わかった、わかった。好きにしろ」
雄太のチンポは下腹に届きそうに起きあがり、ぶらぶらした金玉はその全貌をさらけ出した。

由紀「みんなよく見とくのよ。こうなると金玉はさらに攻撃しやすくなるでしょ」
女性達は笑いをこらえながらうなずいて納得した。
裕子「これより股間の叩き合いの勝負を始めます」
由紀と雄太は向かい合った。
裕子「まず男が女の股間を平手で3割の力で叩きます」
3割だと、一発で倒せば俺の勝ちだ。そう思った雄太は手のひらを由紀のマンコに軽くあてて叩く位置をきめ、腕を引いてその反動で思いきり由紀のマンコを叩いた。
パーン。
雄太は手のひらに湿った肉片を感じた。
「卑怯よ、最初から思いきりたたくなんて」
女性達から野次が飛んだ。
由紀は余裕で動くこともなくにっこり女性達に微笑んだ。
「まさか」
雄太は自分の平手打ちがまったく効かなかったことに驚いた。
裕子「では女が男の股間を3割の力で叩きます」
由紀が位置を確認するため雄太の金玉を手のひらで軽くつかんだ。

「ちょっと待て」
雄太が慌てて言った。
由紀「おじけづいたの。ここまできたら覚悟しなさい」
由紀が金玉を軽くはじいた。
「ヒッ」
雄太の顔が引きつった。
パーン。
由紀の平手打ちが雄太の金玉に決まった。
「ギャッ」
雄太は金玉を押さえて内股になり膝をついた。
由紀「あらあら、こんな軽い叩きで苦しいの。マンコはぜんぜん痛くないわよ。さっきまでの威勢はどうしたのかな。どう、タップする」
由紀はマンコを叩きながら雄太の方へ突き出した。
雄太「ク、クソッ。女なんかに負けるわけがないだろ。まだまだ」
雄太は苦しそうに立ちあがった。
実は由紀はかなり手加減していた。雄太を懲らしめるために彼にはまだダウンしてもらうわけにはいかないからであった。

裕子「男が7割の力で女の股間を叩きます」
雄太が仕返しとばかりに由紀のマンコを指ではじいた。
「プッ」
由紀が馬鹿にしたように吹き出した。
今度こそと雄太は全力で由紀のマンコを叩いた。
パーン。
「あら力強いわね。でも、マンコには効かないみたいよ」
由紀が余裕で言った。
裕子「女が7割の力で男の股間を叩きます」
由紀「今度は強いわよ。耐えられるかしら」
由紀は振り上げた手を金玉めがけて振り下ろした。
「ウワッ」雄太はたまらず腰を引いた。
パーン。
引く腰を追うように由紀の手は雄太の金玉を叩いた。
「ウォー、ウォー」
雄太は金玉を押さえて由紀の足元を転げまわった。

「まだやる気、つぎはもっと強くなるわよ。さ、タップしな」
由紀は苦しむ雄太の前にマンコを突き出した。
「クソー、絶対タップしないぞ」
雄太は筋肉質の体に脂汗を垂らして悶えながら言った。
「タップしないんなら次はこぶしで思いっきり叩き合いね。潰れてもしらないわよ」
由紀が雄太の金玉にこぶしを押しあてて脅すように言った。
「わ、わかった。そ、それ以上押しつけないでくれ」
パン、パン、パン。
空手女のこぶしで金玉を叩き潰されるのを恐れた雄太は、苦しみながらもしかたなく由紀のマンコにタップした。
「あら気持ちがいい。私もここに思いっきりタップしようかな」
由紀は雄太の金玉をつまみ出して手のひらを押しあてた。
「や、やめろー」
雄太が叫んだ。
「フフフ、冗談よ」
由紀が金玉を指ではじいた。
「グェッ」

雄太は力尽きた。
裕子「女性の勝ち」
「やったー」
女性達から大きな歓声があがった。
由紀は金玉を押さえて苦しむ雄太を見下ろしながら勝ち誇ったように髪をかきあげた。
「裕子さん、男が回復するまで少し休憩しましょう。次は蹴り合いよ」
由紀が余裕で言った。
どうやら由紀は雄太に徹底して思い知らせるようであった。
雄太は更に女性達から男としての屈辱を受けようとしていた。

第五章

暫くして、雄太は裕子にせかされ金玉の痛みがとれないまま由紀と向かい合った。
由紀「金玉の痛みはまだとれないようね。でもいつまでもまってられないから蹴り合いを始めましょう。そのかわり2割程度の力から始めてあげるわ」
裕子「男が女の股間を2割の力で蹴ります」
「いくら女のマンコが丈夫でも男の蹴りを食らえば倒れるさ。今度こそ負けないぞ」

と雄太は思った。
由紀は堂々と足を広げて仁王立ちになった。
雄太は由紀のマンコに足の甲を当てて蹴る位置を確認した。それから足を大きく後ろに引き思いっきり由紀のマンコを蹴り上げた。
スパーン。
「まただわ、しょうがないわね」
女性達が呆れていった。
由紀は足を踏ん張ったまま動かず雄太の蹴りをマンコに受けた。
由紀「あーら、もっと強く蹴ってくれないとマンコは感じないわよ」
由紀は余裕の表情でマンコを叩きながら雄太の方へ突き出した。
雄太「クソッ、なんで効かないんだ。エイ、ヤッ」
スパーン。スパーン。
雄太は二度、三度と由紀のマンコを続けざまに蹴り上げた。
相変わらず由紀は余裕の表情で動こうとしない。
裕子「それまでね。交替よ」
「ハアー、ハアー」
雄太は息をきらせていた。

「マン的蹴りは満足していただけたかしら。次は金的蹴りね」
由紀が意地悪くいった。
雄太はなかなか足を開こうとしない。
裕子「さ、男は早く足を開いて」
「ま、まってくれ」
雄太は由紀にすりよった。
雄太「おい、蹴りはやばいからな、2割だぞ。2割で頼むな」
由紀「わかった、わかった。2割ね」
それでも雄太が腰を引いて足を開こうとしないので裕子が無理やり足を開かせた。
由紀は足の甲を雄太の金玉の下にあてて数回軽く金玉を持ち上げた。
由紀がニヤリと笑った。
雄太はゴクリと生ツバを飲み込んだ。
蹴る位置を決めた由紀はその長い足を後ろに引き、その反動で雄太の金玉を2割の力で蹴り上げた。
パシッ。
雄太は踵を上げて由紀の蹴りから逃げようとしたが、すばやい由紀の蹴り足の甲は確実に雄太

の金玉を捕らえていた。
「ギャッ」
雄太は悲鳴とともに由紀の足元に崩れ落ちた。
雄太「2割といっただろ、2割と」
雄太は金玉を押さえて苦しみながら由紀を見上げていった。
由紀「あら、今のは2割よ。金玉ってこんな軽い蹴りでも痛いの。男は弱いわね。マンコならぜんぜん感じない程度よ」
由紀は余裕で雄太を見下ろしながらいった。
裕子「男は踵を上げて金玉蹴りから逃げちゃダメよ。女は足を踏ん張って動かないでしょ」
由紀「審判さん、いいのよ。そのくらいハンディよ」
裕子「さ、早く立って、男はなんども蹴ったんだから続けて女の蹴りね」
雄太は裕子にせかされゆっくり立ちあがった。
雄太「次は男が蹴る番だ」
スパーン。パシン。
雄太は立ちあがると不意をついて由紀のマンコを思いっきり蹴り上げた。
由紀もマンコを蹴ったためがら空きとなった雄太の金玉を2割の力で蹴り上げた。

雄太「ホゲッ」
　雄太はまた前屈みで由紀の足元に崩れ落ちた。
由紀「あらあら、相打ちね。でも、マンコには効かなかったみたいよ」
裕子「マンコはぜんぜん平気みたいね。これじゃ勝負にならないわ。こんな小さな金玉の痛みくらい我慢して立ちなさいよ。次は5割よ」
由紀「ほんと男って金玉蹴られたらぜんぜん弱いわね。さ、早くたって。立てないのなら手伝ってあげましょうか」
　由紀が雄太の金玉をつかんで引っ張り上げた。
雄太「わ、わかった。立つから引っ張らないでくれ。グェッ」
　雄太は由紀に金玉を引っ張られて無理やり立たされた。
　雄太は何とか立ったものの、重苦しい金玉の痛みで今にも倒れそうだ。
　裕子は雄太が倒れないように後ろでささえ、雄太の足が閉じないように彼女の足を絡めて広げた。

裕子「今度こそ続けて女の蹴りね」
由紀「裕子さん、股間をもっとくっつけて」
　裕子は不信そうに股間を雄太のお尻に押しつけた。

スパン、パシン。
　由紀がつま先で裕子のマンコを蹴り上げた。当然、手前にぶらさがっている雄太の金玉は由紀の足首で蹴り上げられることとなった。
裕子「なーるほど、キンマン蹴りか。でもこの程度じゃ感じないわ。あら、男は苦しそうね」
　裕子は倒れそうな雄太を無理やり支えた。
裕子「わたしまだ感じないのよ。一緒に蹴られましょうよ」
雄太は由紀の金的蹴りから逃れようと踵を上げてつま先立ちとなっていた。
裕子「ちょっと、動かないでよ。ほら、私のように踵を下ろして足を踏ん張りなさいよ。いくら背伸びをしても股の下でぶらぶらしている金玉は隠れないよ」
　ピシッ。
　裕子が後ろから雄太の金玉を指で弾いた。
「クスクス」
　裕子に後ろから指で弾かれた金玉が前後に揺れるのを見た女性達は笑いをこらえられなかった。
雄太「ヒイー、もうまいった。やめてくれ」
由紀「まだタップは早いわよ。もう少し楽しまさせていただくわ」
　雄太がタップしようとしたが裕子に支えられているので由紀のマンコに手が届かない。

このとき由紀は5割程度の力で金玉が蹴り足の甲と恥骨の間に挟まらないように蹴っていたのだった。
男を悶絶させないように調整しながらの金的蹴りは金的の威力を熟知した由紀ならではの技であった。

由紀「それ、もう一丁」
スパン、パシン。
雄太「ゲボッ」
かなり手加減してあるとはいえ、由紀に続けて金玉を蹴られた雄太は金玉を押さえながら力なく由紀の足元に再び崩れ落ちた。
「あれ、今の少し強かったかな。マンコが少しむずがゆかったわ」
同時にマンコに蹴りを受けた裕子がいった。
雄太は由紀の足元で悶え苦しんでいる。
由紀「女に金玉を蹴られた気持ちはどう。金玉なんかぶら下げてるからそんなに苦しまなければいけないのよ。女の股間には急所なんてないのよ。ほら、よく見てごらん」
由紀は勝ち誇ったように雄太の頭上にマンコを突き出した。
雄太は苦し紛れに逆転を狙って突き出された由紀のマンコを下からこぶしで叩いた。

ゴンッ。
由紀「往生際が悪いわね。それ」
ピシッ。
由紀は足元の雄太の金玉をつま先で蹴飛ばした。
「ギャッ」
雄太は悶えながら手を金玉に戻した。
裕子「あら、かわいそうね。こんな小さな金玉がそんなに苦しいのかしら。女にはわからないわね」
由紀「さ、強いマンコにタップしな。早くタップしないと金玉を蹴り潰すわよ」
由紀は雄太の金玉のすぐそばに鋭い蹴りを放った。その蹴りの風圧で玉袋の毛が揺れ動いた。
雄太「ワワッ」
パン、パン、パン。
空手女に金玉を蹴り潰されるのを恐れた雄太は、苦しみながらもしかたなく由紀のマンコにタップした。
裕子「また、女性の勝ち」
由紀「面倒だから続けてやるよ」
裕子「いよいよ握り合いね」

第六章

裕子は前かがみで苦しんでいる雄太を仰向けにし、両足を開いて押さえつけた。
由紀は雄太の顔の上にまたがり強いマンコを見せつけた。
苦しみながらも由紀のマンコを目の前にした雄太のチンポは勢いをました。
これも由紀の予定通りであった。
由紀は無防備に垂れ下がった雄太の金玉を片手でむんずとつかんだ。
こうなったらさすがの雄太も由紀の思うがままである。

由紀はまず右の金玉を少し力を入れて握った。
雄太「フギャー、潰れるー」
裕子に両足を押さえられ、由紀に上に乗られているので痛くても手で金玉を押さえることができない。
由紀「悔しかったらあんたも握ってみたら」
「クソッ」
雄太は目の前の由紀のマンコを握ろうとするが握るところがない。

雄太はしかたなく目の前の肉ヒダを指先でつまんだ。
由紀「くすぐったいわね。女の股間は急所なんでしょ。そんなんじゃ効かないわよ」
雄太はバカにされて悔しかったが、何をやっても無駄な抵抗であった。
由紀「攻撃しやすいように、もっとマンコを近づけてあげるわ」
由紀はマンコを雄太の顔に押つけた。
雄太「フングッ、フングッ」
雄太はマンコで鼻と口を塞がれ息ができない。
由紀は数回マンコを雄太の顔に押しつけたり離したりして雄太の反応を楽しんだ。彼女は自分の股間の下で男がなんの抵抗もできずにもがいていることを快感に感じていた。
女のやりほうだいである。
マンコを顔に押しつけられた雄太は、マンコは男が腰を使ってパッコン、パッコンとぶつけても平気だったことを思い出した。
シックスナインの態勢では金玉は弱点となりマンコは武器になるようであった。

由紀「そろそろいくわよ。それっ」
由紀は右の金玉を握る手に力を加えた。
雄太「フンガー、フンガー」

雄太は由紀のマンコの下で手をパタつかせている。
由紀「なに、あばれてるの。あっ、そうだったわね。ごめんね」
由紀は雄太がマンコにタップできないであばれていることに気づき、押しつけたマンコを雄太の顔から少し持ち上げた。
雄太「ギャー、まいった。まいった」
パン、パン、パン。
雄太は右の金玉を由紀に握られた苦しみに耐えきれず、目の前の由紀のマンコにタップした。
由紀「まだ、そんなに力入れてないよ。この程度で降参なの」
由紀は物足りなさそうに手の力を緩めた。
雄太はほっとした顔をした。
裕子「最初の威勢はどうしたのかな。男は金玉を握られると女に逆らえなくなるのね」
由紀「さんざん女をバカにしてきたんだから左の金玉にも反省してもらわないとね」
由紀は今度は左の金玉を少し力を入れて握った。
「タップしただろ」
パン、パン、パン。
雄太は左の金玉を由紀に握られた苦しみに耐えきれず、再び目の前の由紀のマンコにタップした。

「なにかやってるの、マンコはもっと強く叩かないとわからないわよ」
由紀は左の金玉を握る手に更に力を加えながらいった。
「ギョエーッ。つっ、潰れるー」
パン、パン、パン、パン、パン、パン。
雄太は祈るような気持ちで思いっきり由紀のマンコを叩いた。
「あら、もう降参なの。潰れるまで握りたいけどしかたないわね」
由紀が力を抜いた。
裕子「またまた、女性の勝ち」
脂汗をかいてすごい形相だった雄太は落ちつきを取り戻し、肩で大きく息をした。
それを見ていた女性達は、鍛えた男が股間にぶら下がった小さな金玉一個を女に握られただけでこれほど苦しむものかと不思議に思った。
由紀は雄太の顔の上からマンコを外した。

雄太は仰向けのままぐったりしていた。
由紀は雄太の金玉を下から握り直し、右へ捻りながら持ち上げた。
雄太はなすがままに体を右へ回転し四つんばいになった。
由紀が手を離すと雄太の金玉が由紀の目の前でぶらぶら揺れた。

「プッ」
あまりのコッケイさにさすがの由紀も思わずふきだしてしまった。
由紀「さ、みんなも服を脱いで金玉より強いマンコをこの男に見せつけてやってね」
女性達は全裸になり、四つんばいの雄太の前に足を広げて立ち並び、雄太を見下ろした。
雄太は並んだ女性達の強そうなマンコを見上げた。
どのマンコにも金玉のようなぶざまな急所などぶら下がっていなかった。

由紀は四つんばいの股の下でぶらぶら揺れている雄太の金玉を下から握り締めた。
「ギャーッ」
また雄太の形相が激しくなった。
由紀「懺悔の時間よ。マンコは急所なの。はっきりいわないと離さないわよ」
雄太「わかった。わかった。いうから少し力を緩めてくれ。グェーッ」
由紀は少し力を緩めた。
雄太「マン的が急所なんてのは男の妄想だ。女の股間は急所じゃない。マンコは急所じゃない。これでいいだろ」
由紀はまた手に力を入れた。
由紀「女をバカにしてるの。心がこもってないぞ。女性のみなさん、これどうします」

由紀はつかんだ金玉を雄太の尻の上へ引っ張り上げ女性達の目の前に差し出した。
「そんなもの握り潰しちゃって」
「女をバカにした男の金玉なんか潰しちゃえ」
女性達が口々にいった。
由紀「そういうことなんで握り潰しちゃうね」
由紀は女性達に見えるように金玉を捻り上げた。
由紀「女性のみなさん、よく見て。これをつかんでると男は女に逆らえないのよ」
女性達の視線が捻り上げられた金玉に集中した。
雄太「グェッ。わ、わかったからもう止めてくれ」
由紀「そうわいかないわ。これまで金的を禁止して、さんざん女をバカにしてきたんでしょ。その女に金玉を握りつぶされて地獄の苦しみを味わいなさい」
由紀は手の中の雄太の金玉を更に強く握り締めた。
雄太「ワッ、ワッ、私が悪うございました。助けてください」
由紀「金玉を握り潰されたくなかったらマンコと金玉のどっちが強いかいいな。」
雄太「それだけは男の意地にかけていわないぞ」
由紀「まだそんなこといってるの。早くいわないと金玉を握り潰すぞ。それギュー」
雄太「ギャーッ、いうから。いいますから。握り潰さないでください」

由紀「女性達のマンコを見上げながら女と男とどっちが強いかいいな」
雄太「ハイ、金玉よりマンコの方がはるかに強いです。金的ありだと絶対に男は女に勝てません。男より女の方が強いです。私が間違ってました。女性のみなさん、つ、潰さないで下さい。グェーッ」
女性達がうなずいた。
由紀「弱いやつだな。しかたない、金玉を握り潰すのは勘弁してやる」
ポンッ。
由紀は金玉を軽く叩いて手を離した。
裕子「女性の大勝利です」
「やったー、男に勝った」
女性達も大喜びだ。

「おつかれさま、よくがんばられましたね」
脂汗にまみれた雄太の顔を康雄がタオルでぬぐいながらいった。
雄太は安堵のあまり言葉が出なかったがその瞳に悔しさはなかった。
由紀「負けたんだから約束どおり私のいうことをきいてもらうわよ」
雄太「わかりました。どうしたらいいんですか」

由紀「そうね。四つんばいの股の下でぶらぶらしている金玉を女性達が一人ずつ後ろから蹴り上げるってのはどうかしら。」
「ワー、おもしろそう」
「やってみたーい」
「わたしからやらせて」
女性達がやる気になって口々にいった。
雄太「ワワッ、そればかりは勘弁してください」
康雄「由紀さん、僕からもお願いします。これ以上やったら本当に金玉が潰れてしまいます。雄太さんはもう十分反省しています」
由紀「フフフ、金玉の痛みのわかる男同志の友情ね。わかったわよ。今度雄太さんとこの男性達と練習させてくれたらいいわ」
雄太はその言葉を聞いて力尽きたのかぐったりした。

由紀「最後の仕上げといくか」
由紀は再度雄太を仰向けにし顔をまたいだ。
雄太は今度こそ由紀のマンコで息を止められるのではないかと恐怖を感じた。
それでも、雄太のチンポは再びいきり立った。

由紀は雄太の顔の上にマンコを押しつけた。
裕子が左右の金玉を手のひらに包んだ。
由紀はいきり立った雄太のチンポを両手でなで上げた。
雄太は最後の力を由紀のふくよかな胸元にぶちまけて果ててしまった。

一仕事終えて由紀と裕子が密かに話していた。
裕子「ねえ、由紀さん。さっき男はかなり苦しそうだったけど金玉をかなり強く握ったの」
由紀「そんなわけないでしょ。私の力で本当に強く握ったらあの程度ではすまないわ。かなり手加減してるわよ」